

「筆賣幸兵衛」（河竹默阿彌）

明治初期の東京深川。舊幕臣の幸兵衛は維新で家祿を失ひ、商賣に失敗して裏長屋に逼塞し、妻と二人の娘と一歳の乳飲子を抱へ、内職で作つた筆を賣つて細々と暮してゐたが、妻は産後の肥立が悪くて死に、長女お雪は泣き濡れた餘りに失明する。

寒風吹く雪の正月の或日、乳飲子を懷に貰ひ乳を求めて彷徨つてゐた幸兵衛は、とある邸の門先でひもじさに泣く赤兒をあやしてゐると、泣聲を聞いた邸の内儀に聲を掛けられる。内儀は前月赤兒を亡くし、乳が張切つてゐるのだと云つて乳をくれた許りか、幸兵衛の身の上に同情して、一圓（今の二萬圓程）の金子と亡兒の立派な産着とを強く固辭する幸兵衛に受取らせる。一方、お雪は目が治る様にと願掛けをして、深川萬年橋のお稻荷様に裸足參りに行つてごろつきに亂暴されさうになるが、助けてくれた通りすがりの男が、これ又身の上を憐れんで一圓を恵んでくれる。思掛けず二圓の金が入り、皆で「久し振りで炊いた飯を喰べた」幸兵衛が、

これも「日頃親子が信心なす水天宮様の御利益」と喜んでゐる處に高利貸がやつて来て、金も産着も借金かたの形だとして奪ひ去る。幸兵衛は高利の借金をして亡妻の葬儀を出してゐたのだ。

一家が悲嘆にくれてゐると、塀へいを隔てる裕福な隣家から新年を壽ぐ華やかな淨瑠璃じやうるりが聞えて来る。「同じ世界の人のなれど身の盛衰と貧福は、斯うも違ふものなるか」と幸兵衛は痛嘆し、死を思ふが、子供達を思ひ躊躇ためらつてゐると、お雪が云ふ、「侍らしう子供達を先へ殺して父様とゝさまは、御切腹をなされまして、立派にお果てなされませ」。次女のお霜からも「姉さんより私を、先へ殺して」と云はれて幸兵衛は念佛を唱へ、短刀を赤兒に向けるが突きかねて、短刀を投捨て泣伏すと見るや、突如すつくと立上り、能の「船辨慶」の末尾、壇ノ浦に果てた平の知盛ともしげの亡靈が薙刀なぎなたを搔込んで激しく舞ふ場面を、古箏ふるばうきを振回しながら狂つた様に舞ひ、諺うたひ、暴れ回つた末に赤兒を抱へて裏の大川に身を投げる。

その後、幸兵衛は助けられて正氣に戻り、とどの詰りは家族一同幸福な結末を迎へる事になるのだが、無論、作品の見處みどころは、悲運の裡にも「侍らしう」矜持きやうぢを捨てまいとして狂氣に追ひやられる幸兵衛と、侍の娘らしく健氣に振舞ふ娘達の哀れさ凛々りんりゃしさ美しさの描寫にある。しかもこれが書かれた明治十年代は黙阿彌自らが悲運に泣いた時代でもあつた。歐化熱の高揚に

よつて演劇界でも江戸以來の舊劇への風壓が強くなり、就中その代表者たる默阿彌は半可通の歐化主義者共の冷笑嘲罵の標的となつた。即ち默阿彌は「荊の冠を戴かねばなら」なくなつたのだが、「表面的には曾て反抗の氣勢を示さ」ず、「魚のごとくに黙して俎上に横たはつてゐた」のであつて、「思へば實に涙である」と岡本綺堂は書いてゐる。默阿彌が從來の河竹新七の名を改め河竹默阿彌と名乗つたのは「筆賣幸兵衛」執筆の前年であつた。幸兵衛が知盛の亡靈を演じて舞ひ狂ふ姿の背後に、さういふ默阿彌の無念が、否、維新の諸々の敗者の無念が潜んでゐると私は見たい。幸兵衛やお雪やお霜を支へた封建道德も、「武家の式樂」として嘗ては高い地位を誇りながら維新後は絶滅に瀕した能も、そして固より江戸演劇も、永井荷風が「狂歌を論ず」（大正六年）に於て云ふ、「儒學並に佛教の根據」を有する古來「一環せる脈絡」の所産に他ならない。そして荷風は「凡て根底あるものは含蓄の味あり」であつて、「斯の如きを以て眞の文明となすべき」だが、「舊文化破壊せられて新文化遂に成らず」、それが現代日本といふ偽文明の正體だと云ふのである。（河竹默阿彌集、筑摩書房）